「子どもはみんな問題児」を読んで

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　石井菜奈

この本を手に取るにあたって、まずインパクトのあるタイトルに驚いた。そして日頃の保育で関わっている子ども達や自分の幼少期のことまで思い起こし、過去の自分とも向き合うきっかけとなった。冒頭部分の文章に「自分丸出し」という言葉を見つけた。言葉の意味は理解出来るが、大人になった今の自分には到底出来ない生き方であるように感じた。大人には理想があり目標をたて行動する力があるが、子どもには大人以上に「こうしたい」「ああしたい」という欲望があり、そこで出会った人や物から常に学びを得ているのだと思うと子どもの偉大さを感じる。

昔、母から「自分は子どもの頃、早く大人になりたいと思っていた」のだと聞いたことがある。理由を聞くと「大人はご飯を残しても叱られないから」だと教えてくれた。母は子どもの頃、とても少食であったそうだ。しかしご飯を残すと両親に叱られるため、苦しい思いをしながら少しずつご飯を口に運ぶしかなかった。食事の時間を「苦痛」とさえ感じるようになっていた頃、子どもであった母がとった行動に、私は「なるほど」と感心した。茶碗に残っているご飯を茶碗の側面に綺麗に張り付け、ご飯の白色と茶碗の側面の白色を同化させると「完食」に見せかけたのだという。もちろん大人の目を騙せるはずもなく、その後はこっぴどく叱られたそうだが子どもなりに考えた知恵である。私も当時、３歳年下の従姉妹とお医者さんごっこをしていた際、医者役の従姉妹に「どういう風に診察すればいいの？」と質問された。そのため自分がよく受診していた耳鼻科の先生の行動を思い出し「いつも先生はこうやって細い棒を耳にいれている」と伝え、従姉妹に提案した。お医者さんごっこのおもちゃの中に実際には切れないハサミを見つけ、それを代用しようという話でまとまった。患者役の私は従姉妹に耳を貸した。何の疑いも恐怖心もなかった。診察が始まって２秒後、耳の中に今までに感じたことのない痛みが走り大声で泣き喚いた。その後、母と耳鼻科に行き「外耳炎」と診断された。何を思ったのか、鼻の中に落ちていたBB弾を入れ、出てこなくなってしまったこともある。「どうして月はいつまでもついて来るのだろう」と思っていた頃もある。いつも耳から入ってくる大人の会話の意味が理解できず「大人になったら、みんな英語を話すようになるんだ」と純粋に思っていた時期もある。

当時の母のお母さんが私なら祖母と同じように叱り、耳を痛めた私に「どうしてそんな危ないことをするの」と話しただろう。でもそれは子どもがどれほど物事をまっすぐに捉え、自分の中に取り入れようとしているかがよく表れているのだと、この本を通じて感じることができた。また「個性を大切に」と言いつつも、自分の声が届かず騒がしくしている子ども達を静かにさせなければと声を張り、どこか注視していた自分はまだまだ未熟であると反省した。子ども達が活動や絵本の世界を心から楽しんでいる時の目はとても綺麗であり、多くの発信が自然と出てくるものだ。その発信から新たな好奇心へと繋がり、また一つ成長していく。そのように考えると、その子どもの興味・関心があることをとことん伸ばしてあげたいと感じた。また子どもの「想像力」を大切にした活動や遊びを取り入れていくことで、更に質の良い保育ができるのではないだろうか。